

コーヒーの伝統は誰のものか？ ——国境を超えた「文化遺産争い」

澤井 一彰 さわい かずあき
関西大学准教授

ユネスコの無形文化遺産には、反復的に実演される劇や音楽、儀礼、語りなどのほか、やはり反復的に作られ口にされる料理や嗜好品が含まれる。食習慣は差別の原因になることもあるが、「文化遺産」ともなると本家争いの火種になってしまうのである。

コーヒーの起源

ここ数年、大学で授業をしていて「コーヒーは欧米に起源をもつ飲み物だ」と思っている学生が意外に多いことに気付いた。スターバックスがシアトルの企業であることはよく知られているし、カップチンやマキアートといったイタリア語に由来することは響きからも、どうもそのように想像するらしい。

しかし、コーヒーの語源が

アラビア語の「カフワ」にあることは、おそらく間違いないだろう。コーヒーの原産地とされるエチオピアや、あるいはその対岸にあるイエメンなどで飲まれていたカフワが一六世紀のオスマン帝国で都市文化として流行し、トルコ語で「カフヴェ」とよばれるようになった。一七世紀なかごろの年代記『ペチエヴィー史』には、ヒジュラ暦九六二年（一五五四／五五年）にイスタンブルで

無形文化遺産としてのトルコ・コーヒー

トルコ・コーヒーは、取手付の金属製のポット（ジエスベ）に、強くローストして細かく挽かれたコーヒーを直接投入し、水から煮出してつくる。フィル



ジエスベから小ぶりのデミタス・カップにコーヒーを注ぐ

ターは用いないので、小ぶりのコーヒーカップの底には細かい澱が沈殿する。コーヒーをすすり終わった後に、残った澱の模様から「コーヒー占い」に興じるのも、トルコ・コーヒーがもつ別の楽しみである。

二〇一三年二月、「トルコ・コーヒーとその伝統」がユネスコの無形文化遺産に登録された。トルコ・コーヒーを愛する

者の一人として、喜ばしい出来事ではあるが、近隣諸国との「文化遺産争い」という火種に油を注ぐことにならないか、という懸念は残る。

国境を超えた「文化遺産争い」

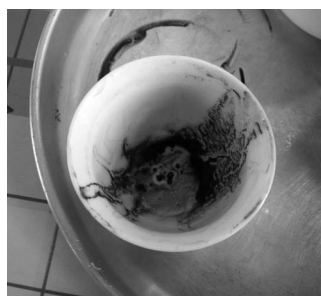
オスマン帝国の各地に広まったコーヒーの習慣は、一九世紀以降に独立したギリシャやアルメニアといった国々に

も伝存している。これらの国々では、「トルコ・コーヒー」ではなく「ギリシャ・コーヒー」や「アルメニア・コーヒー」とよばれており、当然のことながら、それぞれが自国の伝統文化として誇っている。そのため、「コーヒーの三祖」「本家」を主張する各国のせめぎ合いは、さながら文化遺産争いの様相を呈している。

ようにも思われる。しかし一方で、オスマン帝国末期にナシヨナリズムをめぐって生じた数多くの悲劇を考えると、「オスマン・コーヒー」という名称が受け入れられる余地もまた少ないのかもしれない。たかがコーヒー、されどコーヒー。文化遺産争いの根は深く、そして複雑である。



上：オスマン帝国治下にあったパレスチナでも、コーヒーは日常的に飲まれている。アラブのコーヒーは、香りづけにカルダモンが加わるのが特徴



右：カップの底に残ったコーヒーの澱。たわむれにこの澱の模様を読み解いて、コーヒー占いをする者もいる。このときは薄く淹れたので、澱もあまり残らなかった（上、右ともに、撮影・菅瀬晶子）

オスマン帝国史を専門としている日本人のわたしとしては、特定の国名・民族名称を冠するから問題がこじれるのではないか、いっそ現在は存在しないオスマン帝国の名をとって「オスマン・コーヒー」とでもすればいいのではないかと、と思わないでもない。いずれの国々も、かつては長きにわたってオスマン帝国の領域内にあり、オスマン時代を通じてコーヒーの伝統に親しみ、コーヒー文化を育んだわけであるから、理屈はとおる



コーヒーにはチェイサーとしての水とともに、ロクムとよばれる求肥（ぎゅうひ）に似た菓子が添えられることが多い

